

上林曉全集十四

筑摩書房

上林曉全集 十四

昭和四十二年五月二十日初版第一刷發行

著 者 上 林 曉

發行者 竹之内靜雄

發 行 所 東京都千代田區神田小川町二ノ八
筑 摩 書 房

電話東京(29)七六五一(代表)
振替東京四一二三

印刷 大日本法令印刷株式會社
製本 矢島製本株式會社

© A. Kanbayashi

上林曉全集第十四卷目次

隨 筆

昭和二十七年〔續〕

雪のニュアンス……………	三
向井潤吉氏との一タ……………	六
「ポー河の水車小屋」を観て……………	九
髪摘み……………	二
諸國名物……………	三
新春閑眠……………	五
病閑録……………	六
「神曲」が三冊揃ふ話……………	九
將棋名人戦……………	一〇
天沼……………	二
鎮西遠望……………	三
旅の繪葉書……………	五

水郷の旅……………	二八
-----------	----

出世作の前後……………	三〇
-------------	----

歩行練習……………	三一
-----------	----

去年の秋……………	三四
-----------	----

猫ざらひ……………	三五
-----------	----

ものしり時代……………	三七
-------------	----

原稿料の催促……………	三八
-------------	----

昭和二十八年

濱本浩との因縁……………	四〇
--------------	----

庶民歳末……………	四二
-----------	----

無名時代のころ……………	四四
--------------	----

酒わすれ……………	四六
-----------	----

みやこわすれ……………	四八
-------------	----

病中讀書……………	四九
-----------	----

編集者時代の思ひ出……………	五〇
----------------	----

初めての高知行	五七
健康について	五九
追憶	六一
鏡	六四
本道樂	六七
梅檀	七二
私の好敵手	七四
五十歳の辯	七五
初冬の氣分	七九
昭和二十九年	
浅春	八〇
春蘭	八一
酒の卒業生は語る	八三
酒なき人生	八四
モデルの経験	八六

妙雜音	八八
將棋名人戦見物	九〇
ふるさとの海	九三
颱風の思ひ出	九四
終戦の年	九五
安岡縣令の家系	九八
生命を贖める	一〇三
わが家の音楽	一〇八
阿佐ヶ谷案内	一一〇
まともな文章	一一一
圓本合戦時代	一二三
旅行上手と旅行下手	一二七
荻窪の古本市	一二〇
編集者O・Bの述懐	一二三
井伏氏の肖像	一二五
故郷の冬	一二六

昭和三十年

私小説作家の印象……………	一六
熊本土佐會の思ひ出……………	一三〇
新潮と私……………	一三三
酒解禁……………	一三三
ウマメガシ……………	一三五
美幌の老婆……………	一三八
紫雲丸……………	一三九
母校を訪ねて……………	一四〇
古木さんの思ひ出……………	一四二
夜のそぞろ歩き……………	一四三
近代文學と幡多郡……………	一四四
芳水詩集……………	一四六
古本漁り……………	一四七
相州下曾我の風色……………	一四九

女寫眞師……………	一五二
-----------	-----

正宗白鳥の演説……………	一五三
--------------	-----

昭和三十一年

「文章世界」の思ひ出……………	一五五
幡多ところどころ……………	一五七
上川口……………	一五七
入野……………	一五七
中村……………	一五八
以布利……………	一五八
有岡……………	一五九
福田清人との附合ひ……………	一五九
苦澁二十年……………	一六四
「あやに愛しき」……………	一六七
スタジオ見學記……………	一七一
江川太郎左衛門の舊邸……………	一七六

雨乞ひ……………	一七六
丸岡明の父祖……………	一七九
本の始末……………	一八一
故郷の本箱……………	一八三
野猿峠の小鳥焼……………	一八四
蜜柑いろいろ……………	一八四

昭和三十二年

世に知られない小さな歌集に

寄せて……………	一八七
「嵐」・原作と映畫……………	一九〇
木曾馬籠……………	一九三
舊師……………	一九六
千谷先生……………	一九六
田所先生……………	一九八
ちんぷんかんぷんな話……………	二〇〇

角力……………	二〇一
私の食生活……………	二〇三
熊本菖蒲……………	二〇五
良寛展……………	二〇七
伊東……………	二〇八
蘆花墓前祭……………	二一〇
花籠部屋……………	二一一

昭和三十三年

漱石と五高……………	二二三
山本實彦と「改造」……………	二二六
物忘れがひどくなつた……………	二三〇
土讃線……………	二三三
四國遍路の文學……………	二三三
坂本龍馬……………	二三四
座右の書……………	二三五

作家の晩年……………三七

田宮君……………三〇

晝寝夜寝……………三三

田ノ浦舟遊び……………三三

故郷の將棋……………三五

井伏さんとのやりとり……………三六

土佐の中村……………三八

昭和三十四年

幼な友達……………四〇

一冊の「文章世界」……………四三

郷土雜筆……………四四

片上伸 第二の故郷……………四四

江藤新平の舟出港……………四五

「坊さん」慶禪の墓……………四七

尊良親王の御所……………四八

古本漁りの話……………四九

若氣のあやまち……………五一

熊本びいき……………五三

濱本浩はどこにでもゐる……………五五

やもめ暮し……………五五

金比羅参り……………五七

バッタ捕り……………五八

酒のこと……………五九

二級酒……………六一

武藏野をたづねて……………六三

昭和三十五年

昔の仲間……………六四

上林町の下宿……………六五

雨森九大夫の墓……………六九

異國人來訪……………七〇

宇野驛……………	二七三	鹿持雅澄の墓……………	二九一
忘れられない人……………	二七四	寅彦と貫之の邸跡……………	二九三
因縁話二題……………	二七六	岩村透墓……………	二九四
一「地橙孫句抄」に因んで……………	二七六	村の將棋會……………	二九五
二「生のまま素のまま」に……………		箱根・西伊豆……………	二九七
因んで……………	二七七	伊豆から歸りの川端さん……………	三〇〇
正宗さんに會ふ……………	二七八	外村繁君の死……………	三〇一
書かれる身として……………	二八〇	外村君と私……………	三〇三
岩科學校……………	二八一	土佐のすもぐり……………	三〇四
依岡君の思ひ出……………	二八三	「枯木のある風景」まで……………	三〇五
		奥多摩行……………	三〇九
昭和三十六年		玉川屋……………	三〇九
湯本館と湯川屋……………	二八七	御岳参り……………	三一一
石坂洋次郎氏への手紙……………	二八八	野の禪寺……………	三一二
横光さんのこと……………	二九〇	青山葬儀所……………	三二四
高知で……………	二九二	十姉妹死す……………	三二五

昭和三十七年

村の酒徒たち……………	三七
阿佐ヶ谷會……………	三八
忘れ得ぬ斷章……………	三二
武雄さんの死……………	三三
渡川畔の流刑地……………	三四
仕事部屋附近……………	三六
初めてモーニングを着るの記……………	三九
わが家の家賃値上げ問題……………	三二
外村君と酒……………	三三
中野重治の印象……………	三五
「私の祕密」ゲスト……………	三七
秋深き……………	四〇
三寶寺池……………	四一
年賀狀……………	四二

昭和三十八年

夢二題……………	四四
室生犀星……………	四四
川端康成……………	四四
きりぎりす……………	四五
四萬十川の舟遊び……………	四七
昭和三十九年	
野外散策と食物……………	四九
孫アキ子……………	五一
井伏鱒二の初印象……………	五三
昭和四十年	
終戦後時代……………	五四
ポーターさん……………	五六

書道塾……………三三八

よき話し相手……………三三九

昭和四十一年

花……………三六一

泣き中風……………三六二

天上大風……………三六三

思ひ出の人々……………三六四

一喝……………三六四

遅筆……………三六四

大森の家……………三六五

將來ある男……………三六六

評論・感想

昭和六年——十三年

昭和五年後半期の藝術派……………三六九

十一谷義三郎論……………三七三

一聖者……………三七三

二海港詩人……………三七三

三凡人主義……………三七三

四外光派と「古い繪」……………三七四

五常識……………三七六

六希望……………三七六

フフォーリズム以下……………三七七

父と私の文學……………三七八

藤澤清造氏の死その他……………三七九

藤澤清造氏の死……………三七九

嘉村礪多氏の「途上」	三六〇
山下三郎氏の「花」	三六〇
室生犀星氏の「ピアノの町」	三八〇
雑誌「四人」	三八一
相良次郎氏譯「文學の連續性」	三八一
文學者の生活	三八二
福田清人論	三八三
私の文學的計劃	三八五
一 なんでもかんでも書きたい	三八五
二 都會のことを書きたい	三八五
三 清く美しい小説を書きたい	三八六
四 執筆生活について	三八六
藝術小説	三八七
藝術的人格者	三八九
「萬曆赤繪」を讀んで	三九〇
短篇小説について	三九一

トオマス・マンの言葉	三九四
俗流との闘ひ	三九七
新人の足跡	四〇〇
プロ文壇	四〇〇
新人群	四〇一
懸賞當選作家	四〇三
女流作家	四〇三
新人評論家	四〇三
ペンを祭る	四〇四
スタンダールの傲岸	四〇五
歸郷作家の言葉	四〇七
弱小作家	四〇九
田舎の感想	四一〇
一作家の覺悟	四一二
匹夫の志	四一三
作家の心情	四一五

古谷綱武氏の「川端康成」……………	四二七
魯迅の遺言……………	四二九
作家生活……………	四三一
志賀直哉小論……………	四三三
遺族の文章……………	四三四
眠られぬ夜……………	四三六
一九三七年の小説界……………	四三九
文藝時評……………	四三一
僕の文學開眼……………	四三四
柳緑花紅……………	四三六
書誌……………	四三九

隨 筆

昭和二十七年（續）

雪のニュアンス

冬を描いた文學、文學に描かれた冬を、漫然と思ひ浮かべてみる。最初はなかなか思ひ浮かばない。あらゆるロシアの小説は冬であるやうな氣がするだけだった。

その時まつ先に思ひ浮かんだのが、芥川龍之介の「子供の病氣」といふ作品だった。子供の病氣で神經の疲れた芥川が、寒夜におそく後架に立つと、小便の湯氣がもうもうと立つといふのが、印象に残つてゐたのだつた。

この作品を手がかりに、芥川の作品を考へてみると、冬の作品が相當あるのに氣づいた。現に「冬」といふものもある。重い外套にアストラカンの帽子をかぶつて、市ヶ谷刑務所に入つてゐる従兄を訪ねる作品である。身邊の煩勞に疲れきつた芥川が出てゐる。「年末の一日」は、「北風は長い坂の上からときどきまつ直ぐに吹き下ろして來た。墓地の樹木もその度にさあつと葉の落ちた梢を鳴らした。僕はかういふ薄暗がりの中に妙な興奮を感じながら、まるで僕自身と闘ふやうに一心に箱車を押しつつけて行つた……」で終る。薄氣味悪い「齒車」も冬であり、「玄鶴山房」も

冬である。以上は、殆どみな晩年の作品であるが、晩年の芥川的心境は、寒々として、蕭條として、どんよりとして、冬と切り離せないやうである。

志賀直哉氏では、「冬の往來」を思ひ出した。「風は時々往來の砂埃りを捲き上げ、大砲の煙のやうに押寄せて來た」といふやうな冬の往來をあるきながら、友人の戀の話を書くのである。「黒犬」も、冬の往來をあるきながら、無氣味な脅迫觀念に襲はれた昔を思ひ出す作品である。「雪の遠足」といふもある。我孫子生活の一こまである。「山科の記憶」とその續篇たる「痴情」は、京都の冬である。「山科川の小さい流れについて來ると、月が高く、寒い風が刈田を渡つて吹いた。」といふ「山科の記憶」の書き出しは、すでに一篇の悲劇を暗示して、讀む者を物悲しくさせる。主人公の「彼」は、馴染である祇園の茶屋の仲居に會つて、自宅に歸つて來る。家に歸つてみると、「部屋の隅に恰も投り出された襦袢布のやうに不規則な形をして、妻が掻卷に包まり、小さくなつて轉つてゐた。」のである。やがて「痴情」にいたつて、彼は女と手を切ることにする。妻と連れ立つて京都に出てゆく。「大きな牡丹雪が氣持のいい程盛んに降つてゐた。」彼は妻に別れ、自分一人で茶屋へ行かうとする。妻は胸や髪に「ばい雪をつけ、泣き出しさうな顔をして立つてゐる。妻のそばへ寄つて行くと、「妻は片方の肩の上へ首を傾け、哀願するやうに、